

先日、光栄な事に新宿御苑で桜を見る機会を与えて頂き、今年は、朔東の桜も堪能出来るそうなので、二回の花見が出来る。御苑は既にソメイヨシノは散っていたが、「一葉」の花弁が一陣の風に花吹雪となり、その中をゆっくり散策出来た。また、東京は、「はなみずき」が盛りであった。この「はなみずき」日本原産ではなくて、尾崎行雄東京市長が桜をワシントン市に寄付したが、その御礼としてワシントンから送られてきたものである。

さて、この連休を利用して、十勝以外の朔東への小旅行を計画し、短い北海道の春を大いに楽しんだ次第である。幸いな事に (?), 五十肩とかでゴルフは医者止められているので、時間はたっぷりある。



(蝦夷 3 官寺の一つである厚岸の国泰寺の樹齢 200 年を越える老桜樹)

第一回目は根釧方面である。初日は、小雨煙る釧路湿原のカヌー下りと海鮮バーベキューである。カヌーは転覆し易いとは聞いていたが、あんなにも易とも簡単に返るとは驚きだ。寒さに震えていたが、大丈夫だろうか。今シーズン運行初日のノロック号の通過時間に合わせての時間調整は心憎いばかりだ。今年は、海水温が低くて所謂「ときしらず」がなかなか取れないらしい。偶々、昆布森漁港に二本しか上がらなかった、その二本共という貴重な、一本ン万円はするという鮭に舌鼓をうち、今正に旬の味覚である行者ニンニクも旨かった。釧路の幣舞橋は、札幌の豊平橋、旭川の旭橋と共に北海道の三大名橋といわれている。欄干には「春夏秋冬」をシンボライズするブロンズ像が配され、街路灯もエキゾチックな香りを漂わせている。歌にも織り込まれた橋である。

二日目には釧路市から北太平洋シーサイドラインを霧多布まで、途中蝦夷 3 官寺の国泰寺に遊び、琵琶瀬展望台から遥かに見える奇岩を心眼で眺め、霧多布岬の断崖絶壁から海鵜コロニーを眺め、丹頂鶴の飛来を期待しつつ霧多布湿原を貫通して、空腹を押さえつつ一路厚岸に舞い戻る。厚岸の味覚ターミナルであるイタリア料理に使う貝の形をしたパスタとの意のある「コンキリエ」で、昼食だ。海のミルクとも呼ばれる厚岸名産の特大の牡蠣、手のひら大のホタテ、その他海の食材を盆に取り分けて、炭火で焼きつつのかなり遅い時間の昼食を終えて二日間の第一回目の小旅行は無事に終了した。

国泰寺や子野日 (ねのひ) 公園という桜の名所の蕾はまだ硬かった。開花予想日は 18 日とか。国泰寺では、手持ち無沙汰の受付の小母さんが、我等御一行様の入館を大歓迎してのガイド役を引き受けてくれたが、はまり役だった。(国泰寺等蝦夷 3 官寺は、朔東から第 51 号を参照。) 国泰寺で見つけた珍しい碑が「魚魂碑」である。国泰寺の樹齢 200 年程の北海道の銘木でもある「老桜樹」、大日本択捉の標柱を千島にたてた近藤重蔵が 1798 年に持ち帰って植えた「色古丹松」や 200 年は越える鉢植えの杏等歴史の重みを感じさせて呉れる。厚岸はかつては道東の中心であったというが、それを感じさせる国泰寺とその周辺だ。

今回の旅行で果たせなかったのが、シーサイドラインに沿う海中に突き出た奇岩の見物である。根室半島花咲灯台の車石(wheel stone)と同様一見の価値ありと言われるものらしい。然しながら、聞けば、シーサイドラインから見えないし、間道を海岸に下る事もまま

ならぬとのことであり、望ましきは、海岸に沿って船上から眺めることだそうだ。残念ながら、そのような観光船は就航していないので、舟をチャーターする？大変なことだ。

追記：魚魂碑が珍しいと書いたが、昨日留真温泉（浦幌町の秘湯？何故か入浴客が多かった。行者ニンニク採りを終えた人達が入浴しているようだった。シーサイドラインもそうだったが、温泉までの道にも沢山の車が駐車しているのが見受けられた。5月の半ば位までが旬だとも、今年は雪が多かったせいか少し遅いようだとも言われるが、・・・）から帰る途中、家畜市場に「畜魂碑」なるものが建立されているのを見かけた。信心篤い日本人ならではのことである。

（参考：各種の観光パンフレット、聞き取り）

オホーツク正面の「小さな春」と題した小旅行記は次の機会に譲る。